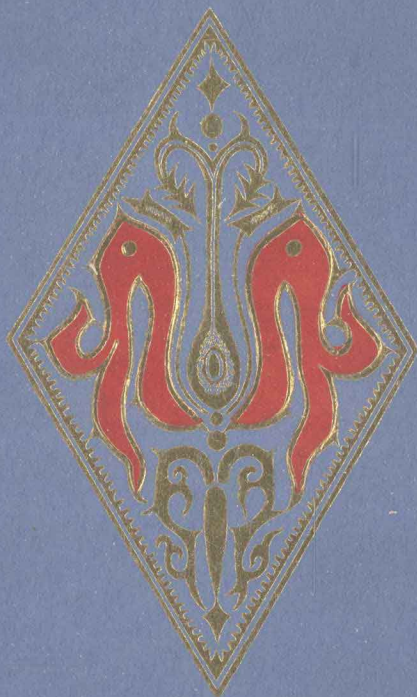




覺眼=性

康作創星摩生室



版社新

大正八年十二月廿五日印刷
大正九年一月五日發行

(定價壹圓六拾錢)

著 者

室 生 犀 星

發 行 者

東京市牛込區矢來町三番地中の丸
佐 藤 義 亮

◀性に眼覺める頃▶

發 行 所

東京市牛込區矢來町三番地
新 潮 社

電話番町 (長) 八〇九番
八九九番
振替東京 一七四二番

印 刷 所

東京市神田區宮本町五番地
電話下谷四〇六七番

新 潮 社 印 刷 部

(印刷者)

高 橋 治 一

この食しき最初の創作集を

瀧田哲太郎氏におくる

春の寺

うつくしきみ寺なり

み寺にさくられうらんたれば

うぐひすしたたり

さだかならずもお七の憂愁。

さくら樹にすずめら交りまひ

かんかんと鐘鳴りてすずろなり。

かんかんと鐘鳴りてさかんなれば

をとめらひそやかに

ちちははのなすことをして遊ぶなり。

門もくれなる炎炎と

うつくしき春のみ寺なり

序

私はいつか自分の生ひ立ちを書いておきたいと思ひながらゐて、つい書きなれない文章のことゆゑ、永い間それを果すことができないでゐた。ところが今年の春、本郷のある裏町から電車通りへ抜け出る近道で、ちやうど其處にある小學校の唱歌室の前を通りかかると、折柄音楽の時間だつたと見えて、美しい唱歌の聲が落ちついた優しいピアノに伴れて、まるで天にでも囁く清朗な凱歌のやうに、いきいきした邪氣ない魂とともに私の奥の奥なる心にゆききした。私はおもはず其處の鐵柵に右の手をおろして起つてくる唱歌を永く偷み聞いた。憂鬱な北方のある小學校の一室に、さびたオルガンに引きずられるやうにして唱つてゐた寒げな併し頬の紅い少年がすぐ思ひ出された。これは繪畫も習字も下手であつたが、生れながらにして唱歌が好きであつた。筒袖からぶら下げた二本の手の甲をびんとそらせ、みじかい袴のひだのところにくつつけるやうにして、小さい胸を張りながら小鳥のやうに歌つたものだ。

私はその學校のそばをはなれると、あのころのことを是非書きたいと思つた。間もなく私は毎日机に向つて、あるひは五枚、あるひは十枚といふやうに書きすすんで行つた。晩、床につくとき明

日書くシーンを考へたり、そのなかに出てくる人人のことを思ひ出したりした。そして私の「幼年時代」が生れた。

私を見つけてくれたのは「中央公論」の瀧田氏であつた。七月のある朝、瀧田氏が見えられて、そして世間の批評などはどうでもいいから書け、あとがあるなら引續いて書け、善い批評家は良く見てくれる。悪い批評家には悪くしか見えない。どんなに言はれたつて怖ぢけるなど言つてくれた。私は一種の戦慄と重壓とを同時に心の内外に感じた。運だめしだと思つた。あるかぎりの力をためしに見る時だと思つた。自分でも目の色が變つてくるやうな氣がした。一切の運命が自分のままになるか、そいつが背を向けて行きすぎるかといふ處に自分は立ちどまつた。いまは力が、靜まりかへつて、重く輝いて少しづつ沁み出てくることを感じた。自分は少しづつ肥り出した。書けば書くほど、多年重かつた頭がだんだん軽くなり出した。家の中の空氣や、書棚の本などもみな聲をあげて、うしろから壓しつけるやうな氣がした。わき目もふらずに仕事をした。生れて初めて一人前になれたのだといふ氣が、書いたもののなかから、いまは何よりもはつきりと映り出した。「幼年時代」の批評はかなり氣になつたが、みんな束になつて來いといふ氣がした。出るものは出ずにゐられない

のだといふ氣がした。瀧田氏に會ふと悪くならうんと悪くいはれたのいいと言つてくれた。

そのうち自分は澤山の手紙を未知や既知の先輩からもらつた。みんな力になつて、こなれて胸からはじき出た。自分のやうに少數の友人しか持たないものにとつて、何より自分のちからとなるのは友の言葉だ。

さうして此の自傳的小説が今一冊にまとまつたのである。この書物は私の生涯のなかでも他のものに較べて決して劣らないものである。もう再度とかけないものだといふ氣がする。幼年期や少年期の苦しみ惱みもいまは酬いられ慰められてゐるやうな氣がする。みんな溫かい。みんな喜んでゐる。みんな私の手につながれてゐる。さうして呼吸をやすめてゐる。亡き父も姉も死んだ友もボタンも。みんな微笑つてゐる。私も微笑つてゐる。この小さな天國の置かれた地上に歩みをとめてくれる未知の友もむづかしいことを言はないだらう。

自分のこの幼ない文章をよんでくれる人があれば、その精神だけを汲みとつてさへ貰へば足りる。それだけをいまは祈る。

千九百十九年秋深、田端高臺にて

室 生 犀 星

例言

命題はいろいろ考へたが、やはり「性に眼覺める頃」とすることにした。

この書物について佐藤春夫氏にたくさんのお世話になつたことを感謝します。

本書執筆中加能作次郎氏にはげまされた。私と郷土を隣り合せた同氏の言葉はいつも嬉しく感じた。

本書を瀧田哲太郎氏にささげて自分をここまで掘り出して下すつたおれいを申しのべます。

目 次

幼 年 時 代		一
抒 情 詩 時 代		七
性 に 眼 覺 め る 頃		一〇七
あ る 山 の 話		一三三
或 る 少 女 の 死 ま で		二〇九
一 冊 の バ イ ブ ル		三二七
郷 國 記		三三〇

幼
年
時
代

幼年時代

一

私はよく實家へ遊びに行つた。實家はすぐ裏町の奥まつた廣い果樹園にとり圍まれた小じんまりした家であつた。そこは玄關に槍が懸けてあつて檜ひのきの重い四枚の戸があつた。父はもう六十を越えてゐたが、母は眉の痕の青青した四十代の色の白い人であつた。私は茶の間へ飛び込むと、

「なにか下さいな。」

と、すぐお菓子をねだつた。その茶の間は、いつも時計の音ばかりが聞えるほど靜かで、非常にきれいに整頓された清潔な室であつた。

「またお前来たのかえ。たつた今歸つたばかりなのに。」

と言つて茶棚から菓子皿を出して、客にでもするやうに、よくようかんや最中を盛つて出してくれるのであつた。母は、どういふ時も菓子は器物に容れて、いつも特別な客にでもするやうに、お茶

と添へてくれるのであつた。茶棚や戸障子はみなよく拭かれてゐた。私は長火鉢を隔つて坐つて、母と向ひ合せて話すことが好きであつた。

母は小柄なきりつとした、色白なといふより幾分蒼白い顔をしてゐた。私は貰はれて行つた家の母より、實の母がやはり厳しかつたけれど、樂な氣がして話されるのであつた。

「お前おとなしくしておゐてか。そんな一日に二度も來ちやいけませんよ。」

「だつて來たけりや仕樣がないぢやないの。」

「二日に一ぺん位におしよ。さうしないとあたしがお前を可愛がりすぎるやうに思はれるし、お前のうちのお母さんにすまないぢやないかね。え。判つて——。」

「そりや判つてゐる。ぢや、一日に一ぺんづつ來ちや悪いの。」

「二日に一ぺんよ。」

私は母とあふぐとに、こんな話をしてゐたが、實家と一町と離れてゐなかつたせゐもあるが、約束はいつも破られるのであつた。

私は母の顔を見ると、すぐに腹のなかで「これが本當のお母さん。自分を生んだおつかさん。」と心のそこでも呟いた。

「おつかさんは何故僕を今のおうちにやつたの。」

「お約束したからさ。まだそんなことを判らなくてもいいの。」

と、母はいつも答へてゐたが、私は、なぜ私を母があれほど愛してゐるに關はらず他家へやつたのか、なぜ自分で育てなかつたかといふことを疑つてゐた。それに私がたつた一粒種だつたことも私には母の心が解らなかつた。

父は、すぐ隣の間に居た。しかし晝間はたいがい畠に出てゐた。私はよくそこへ行つてみた。

父は、葡萄棚や梨畠の手入をいつも一人で、黙つてやつてゐた。なりの高い武士らしい人であつた。「坊やかい。ちよいと其處を持つてくれ。うん。さうだ。なかなかお前は慇巧だ。」

と、父はときどき手傳はせた。

畠は廣かつたが、林檎、柿、すもも等が、あちこちに作つてあつた。ことに、杏の若木が多かつた。若葉のかけによく熟れた美しい茜と紅とを交ぜたこの果實が、葉漏れの日光に柔らかくおいしうに輝いてゐた。あまりに熟れすぎたのは、ひとりで溫かい音を立てて地上におちるのであつた。「おとうさん。僕あんずがほしいの。採つてもいいの。」

「あ。いいとも。」

私は、まるで猿のやうに高い木に上つた。若葉はたえず風にさらさら鳴つて、あの美しいこがね色の果實は私の懷中にも手にも一杯に握られた。それに、木に登つてゐると、氣が清清せいせいして地上にゐるよりも、何とも云へない特別な高いやうな、自由で偉くなつたやうな氣がするのであつた。たとへば、さういふとき、道路の方に私と同じい年輩の友だちの姿を見たりすると、私は、その友達に何かしら聲をかけずには居られないのであつた。自分のいま味つてゐる幸福を人に知らさず居られない美しい子供心は、いつも私をして梢にもたれながら軽い小踊りをさせるのであつた。

畠は、一樣に規則正しい畝や圍かこひによつて、たとへば玉茱の次に豌豆があり、そのうしろに胡瓜の蔓竹がひと圍かこひ、といふ順序に總てが整然とした父の潔癖な性格と、むかし二本の多少を腰にした嚴格さの表はれでないものはなかつた。父の野良犬を追ふとき、小柄こづかでも投げるやうに、小石は犬にあたつた。または鳥からすなどを趁ふ手つきが、やはり一種の形式的な道場癖をもつてゐて、妙に私をして感心させるやうな劍術を思はせるのであつた。

父の居間には、その襖の奥や戸棚には、驚くべき澤山の刀劍が納められてあつた。私はめつたに見たことがなかつたが、ぴかぴかと漆塗の光つた鞘や、手柄の鮫のぼつぼつした表面や、かけじりし×に結んだ柄糸の強い紺の高まりなどを、よく父の顔を見てゐると、なにかしら關聯されて思ひ浮ぶのであ

つた。

それに父は非常に健康であつた。へいぜいは俳句をかいてゐた。父は葡萄棚から射す青い光線のはひる窓さきに、習字机を持ち出して、よく短冊をかいてゐた。幾枚も幾枚も書きそこなつて、

「どうも良く書けん。」

などと言つて、うつちやることがあつた。母はさういふ日は、次の間で縫仕事をしてゐた。れいの音一つない家の中には八角時計が、カタコトと鳴つてゐるばかりであつた。父も母も茶がすきであつた。二人で茶をのんでゐるとき、私も遊び友達に飽きてしまつて、よく其處へ訪ねてゆくことがあつた。

私はよく母の膝に凭れて眠ることがあつた。

「お前ねむつてはいかん。おうちで心配するから早くおかへり。」

と父がよく言つた。

「しばらく眠らせませうね。かあいさうにねむいんですよ。」

と、母のいふ言葉を私はゆめうつつに、うつとりと遠いところに聞いて、幾時間かをぐつすりと睡り込むことがあつた。さういふとき、ふと眼をさますと、はづか暫らく睡つてゐた間に、十日も

二十日も経つてしまふやうな氣がするのであつた。何も彼も忘れ洗ひざらした甘美な一瞬の樂しさ。その幽遠さは、あだかも午前に遊んだ友達が、十日もさきのことのやうに思はれるのであつた。

母は私のかへるときは、いつも養家の母の氣を氣にして、襟元や帶をしめなほしたり、顔のよごれや手足の泥などをきれいに拭きとつて、

「さあ、道草をしないでおかへり。そして此處へ來たつて言ふんぢやありませんよ。」

「え。」

「おとなしくしてね。」

「え。おつかさん。さよなら。」

と私はいつも感じるやうな一種の胸のせまるやうな氣で、わざとそれを心で紛らすために玄關を駆け出すのであつた。母は、いつも永く門のところに佇つて見送つてゐた。

二

私は養家へかへると、母がいつも、

「またおつかさんところへ行つたのか。」